
「Who are You?」 「I'm your...」

木崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「Who are You?」「I'm your...」

【Nコード】

N2330X

【作者名】

木崎

【あらすじ】

過去の傷を抱えた少年は、東京・渋谷である少女に出会いました。

彼女の名は谷山麻衣。麻衣は少年を「ナル」と呼びます。

どちらの名も少年にとっては特別なものでした。

シグナル・アロー（前書き）

ナル麻衣前提です。無理のある設定がまかりとおっています。またバイオレンスな描写や展開があります。色モノです。

これらが許せる方のみお読みください。

シグナル・アロー

いつだって僕は誰かに踊らされている。あの女然り、さっきの白い魔女然り。

選択肢は常に一方的に与えられる。今だってそうだ。こんな道があるなら何故もっと早く示してくれなかったんだ。

あんまりだろう。自分を捨てて「彼」になりきって生きてきた僕に、今さら僕自身として生きろだなんて。

日本は東京、渋谷のスクランブル交差点のと真ん中に、彼女は突っ立っていた。

栗毛で小柄な、女性と呼ぶにはさしつかえがあり、しかし少女と呼ぶには成熟している容姿。90年代のファッションの彼女は、ファッションブルな女性が大勢闊歩する交差点の中でひどく浮いて見えた。

すでに青信号が点滅しているにも関わらず彼女はきよろきよろと首を巡らせるばかりで動き出さない。

僕は走って行って彼女の手を取った。「うえ!？」とすっとんきような声を上げる彼女に構わず、僕は彼女を歩道まで連れ出した。交差点の中では、信号が変わり、歩行者の代わりに自動車が行き交いを始めていた。

そこで僕はようやく彼女の顔をまともに見た。

作り自体は飛び抜けて美女じゃない。童顔というんだろう——ただ、どこかで見たような顔だと思った。

何はともあれこれは寄り道だ。さっさと帰らないと。

僕が手を離すと同時に彼女が顔を上げて、その顔がぱっと輝いた。

「ナル！」

——今、彼女は何て言った？

内心動揺して、ともかくと歩き出した。

馬鹿か。何故そう呼んだのか彼女を問い質すべきだろう。いや、これでいいんだ。どうせ何かの間違いだ。知りもしない人間が因縁が詰まった僕のニックネームを呼べるわけがない。

「ナル、待つて。先行くなーっ」

ふり返る。彼女は僕に追いついて、憤慨もあらわに両手を脇腹に当てて仁王立ち。どうやらさっきのは聞き間違いでも勘違いでもなかったらしい。

「もーっ。そんな怒んなくていいじゃん。そりゃ勝手にはぐれたのはあたしのほうだけだよ。そもそも今日エスコートしてくれてたのはそっちなんだから途中でほっぽってくのは英国紳士としてどうなのわけ？」

なんてこった。「ナル」は確かに僕の名前なんだけれど、同時に

僕にとって大切だった人の名でもあるんだ。それをどうして見ず知らずの女性が口にするんだよ。

僕は自身の疑念と彼女の誤解の解消を求めて、混乱をなんとか定型句に直して口にしてみた。

「何故、初対面のあなたが僕のニックネームを知っているんですか？」

二月の寒さとはまた違う因によって、彼女は蒼白になった。

「何、……言ってるの？ 初対面じゃないでしょ。あたしが分からないの？ さっき助けてくれたじゃないっ」

「あんな場所で突っ立っていたら、色々と危ないから声をかけただけですよ」

「そんな……ふざけてるの？」

ふざけてなんかいない。真剣だ。でも、縋るように見上げてくる彼女を無碍にはしたくなくて、表情には出さないまま途方に暮れていると――

僕にしか分からない、あの、視線が、気配が、僕を拘束した。

――あの女に気づかれた。

目の前には彼女。巻き込むわけにはいかない。

「それはこっちの科白です。とにかく、もう帰ったらどうですか」

平静を装えたと思う。彼なら、彼女が呼んだ名の本当の持ち主ならそうするだろうと想像しながら態度をとったから。

歩き出した。なるべく人のいない道を選んで、路地裏の奥へと進んだ。

彼女はついて来た。

「ねえ待って！　お願い、話だけでも聞いて！」

立ち止まりたい。そんな感傷じみた気持ちになる自分に驚きながらも、止まらない。

あの女は僕に何かしかけてくる気にいる。僕には分かるのだ。直感や予感といったあいまいな探知を人は笑うかもしれない。でも、僕には絶対の自信がある。長年かけて培われた僕だけの特異能力なから。

ことあの女の殺意を、この僕が間違うはずがない。

なおも僕を追って来る彼女を撒くために角を一つ曲がってから駆け出した。これで彼女との間に距離を置けるはずだ。

光が届かない湿った袋小路で立ち止まった。

ジャケットの下のウエストポーチから、たっさつき私書箱から回収してきたばかりの仏具を出した。素材は水晶。プルパというチベット仏教の護法短剣だ。

呼吸を整え、精神を研ぎ澄ます。

どこからでも来い。

徒手空拳のまま待っていると、どこからかカサカサと不吉な摩擦音が聴こえてきた。

ビルの影から這いずり出てきた——蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛の群れ。正面のあらゆる影からタランチュラほどの蜘蛛が湧いて出てきている。土蜘蛛か。

うかつには触れない。あれに噛まれて足に障害が残った人を知っている。

足元に一匹寄って来た。息を吸って吐くまでの時間で踏みつぶしたら、土蜘蛛は複雑な形に折られた和紙に変わった。御幣だ。紙に式王子を依り憑かせていたのか。

一匹潰した僕を敵と認識してか、蜘蛛が一斉に向かってきた。できればプルパは温存しておきたかったけど——

「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前！」

背後から九字が聞こえて、土蜘蛛が十単位で御幣に還った。

ふり返ればそこにはさつき撒いたはずの彼女がいた。彼女の手は刀印を結んでいる。拝み屋なのか？

「何故ここに……早くここから離れろ、こいつらは毒蜘蛛だぞ！」
「それはこっちの科白よ！ あんたは退魔法使えないでしょーが！
いいからどいて！——臨兵闘者皆陣列在前！！」

彼女は僕を押しつけて前に出て、九字を切っては土蜘蛛を吹き飛ばしていく。強い。退魔法が複雑化したこのご時勢で、九字なんて単純な術だけで式王子を押し負かせるなんて。

「ナウマクサンマндаバザラダンカン、ナウマクサンマндаバザラダンカン、ナウマ……きゃあー！」

こいつら！ 彼女の足を這い上がろうとしている！

「もういいつ、下がれ」

僕は彼女の肩を掴んで安全圏に引き入れた。彼女はしりもちをついたが、今は構っていられない。コンクリートの割れ目を見定めて、ブルパを突き立てるように投擲した。

蒼白いスパークがあつて、土蜘蛛は一匹残らず掻き消えた。

——さすがは滝川さん折り紙付きの仏具。試作品でこの威力か。

「何、今の」

「チベット仏教で魔を退ける法具。本来は儀式用だが、知り合いに実戦用に改造してもらった」

言つて、彼女を睨んだ。口にはしないが僕は怒っているんだぞ。

元来気の長いほうじゃないんだ。今回は土蜘蛛だったからよかったけれど、もしこれが本物の毒蜘蛛だったらどうなっていたか。

彼女はたじろいでいる。それはそうだろう。

「君は一体何者だ？ 何故僕を知っている？ 退魔法を使えるなら霊能者だろうが、何故わざわざ自分から、見ず知らずの人間のために危険に飛び込んだんだ」

「だーかーらー！ 見ず知らずじゃないんだってば。あたしはアンタをよく知ってるし、むしろメチャクチャ親しい部類に入るんだよ！」

「生憎来日したばかりで他人と知り合う余裕はなかったんですがね」「来日したばかり？」

なんだ、その不思議そうな顔は。確かに僕はクォーターを通り越

して八分の一しか欧州の血は入ってないが、国籍はれっきとしたイギリス人だぞ——と懇切丁寧に説明すべきか？

悩んでいると、彼女まで何やら悩み始めた。いや、そこで君まで悩まれたら話が進まないだろうが。

しかし、土蜘蛛相手にプルパをすぐ使ったことといい、彼女を巻き込んだことといい。

「まずい状況になったな」

「何が？」

——これ以上は彼女を巻き込めない。

「君には関係ない」

彼女はむっとしたようだった。ほんと、よく考えると表情が変わる人だ。

「あのね。あたしだって一応拝み屋見習いだから、さっきのを説明してくれないと収まりつかないの。それにナルがピンチになってあたしが見捨てられるわけじゃないじゃない。だからこれから何か危ないことがあるなら、あたし、ナルにもっと付きまとうよ」

それは困るんだが。何だって彼女は僕を親しい友人のように呼んで気に懸けるんだ。

彼女は一見して愛嬌のある怒り方をしているが、まんまるな目は真剣な光を宿している。説明しなければ引かないぞ、とその目は言っている。ため息が出た。

「先手を打たれた。向こうに僕の位置を知られる前に叩く手筈だったのに」

「それって、誰がやったかナルは分かっているってこと？」

「いちおう。——それより君、今のことはどう責任をとってくれる

のかな」

非難すれば、彼女は今日出会ってから何度目か、たじろぐ様子を見せた。よし、このまま押そう。

「土蜘蛛は僕を狙っている。術者をどうにかしない限り襲われ続ける。何もしなければ逃げられたのに、攻撃を与えたせいで僕の居場所を向こうに探知された」

「うっ。で、でもっ、またさっきの道具使えば」

「今のは試作品。完成品は三日後まで届かない。これで僕は当面、確実に自分の身を守る術を失った」

「うっ。そうだっ、リンさんは」

「リンのことまで知っているのか。——イギリスだ。今回の来日は僕一人」

「うあゝっ!!」

彼女は頭を抱えて奇声を上げた。これ、本当にさっきまで土蜘蛛なんて凶悪な妖怪の群れに単身突っ込んだ人と同じ人か？

それに気になる。彼女は僕のニックネームのみならず、リンのことまで知っている。日本支部の協力者に彼女に該当する人はいないはずなのに。

「だが、助けられたのは事実だ」

「……え？」

彼女はぽかんと僕を見上げてきた。

式王子と応戦した彼女に、あの女が目をつけないとも限らない。あの女は、僕以外を、排除はしても標的にはしないと分かっているものの、だからといって放置するのは安心できない。

「うちに来てくれないか。君がなぜ僕の素性を知っているのか知りたい」

うち、と言っても僕も入居したばかりで住居としての体裁は整っていないけれど、外にいるよりはましだろう。

「う、うん！ 行く、行きます！」

彼女の笑顔はひどくまぶしかった。

僕が来日するに当たって住居に選んだのは外国人向けのアパートメントだ。買出しやレイアウトが面倒で家具付きにしたけど、こうしてすぐに人を招くことになった今となっては思わぬ形で功を奏していた。

部屋を眺め回す彼女をソファアに座らせる。彼女はそわそわしていて、落ち着きがない。まるで借りてきた猫だ。いや、警戒心は猫より薄そうに見えるな。

「足、見せてくれないか。土蜘蛛に噛まれてないか診るから」
「あ、うん」

彼女はソファアに座ってジーンズをまくりあげる。足の甲から、脛、膝、裏返してふくらはぎを検分する。——これなら大丈夫そうだ。

「噛まれては、いないな」

僕が手を離してすぐ、彼女はいそいそとジーンズを戻した。一応

は女子としての意識があるらしいしぐさにほっとした。

「ねえナル。毒蜘蛛って言ってたけど、噛まれたらあたし、どうな
ってたの？」

「最悪、脚が麻痺して動かなくなっただろう。知り合いの神父がそ
うだった。右足を噛まれて歩くのに不自由しているそうだ」
「げっ」

彼女は顔をしかめて、この歳で杖のお世話になりたくないよお、
と小さく零した。

僕は彼女の正面のソファに座った。

「話してもらえるか。君が僕を知っていた理由と、君自身の事情を」

いい加減にはつきりさせたいし、彼女だって同じ気持ちのはずだ。
彼女の話は奇想天外だった。

いや、彼女が『ナル』とのデート中に白いノラ猫に大事な鍵をと
られて、ノラ猫を追いかけて路地裏に入り込んだら突然交差点に出
た、ということ自体はさほど驚くに値しなかった。原因が特定され
ていないだけで、そんな現象だけなら世界中のどこでも起こりうる。
神隠しだのテレポーテーションだの呼ばれているものだ。

驚くべきは、彼女が語る「ナル」と彼女は恋人同士である点だ。

この時、僕の中には二つの仮説が生まれていた。

「タイムパラドックスの矛盾を説明するため、時間旅行者による歴
史改変で時間軸が分岐して、元の世界と平行した世界が生まれると
するパラレルワールドの概念がある。その説を採るなら、君に出会
っていない時間軸というのもあながち否定できない」

一つは彼女が平行世界の人間であるという説。これもありえない話じゃない。もう一つ——こちらのほうが平行世界よりもまだ実現しやすいのだが、もし正解だとしたら、彼女を僕の前に配置した人物を殺してやりたいくらいに悪質なものだ。

「そちらの世界の僕はどういう人物だ？」

二つ目の仮説に至る確信が出ないことを祈りながら尋ねる。

彼女は指を口に当てて、んー、と考え込んだ。

「イギリス心霊調査協会の調査員で博士号持ち。家族構成は養父母のマーティンさんとルエラさんに、双子の兄のジーン。すっごく強いPKだけど、使うとオーバーワークでぶっ倒れちゃうんだよね」

彼女の言は正解であると同時に、「ナル」が僕の想定していた人物と同一だという可能性を一気に高めた。

「僕との違いは？」

「服装とあたしへの二人称かな。あたしのナルは『お前』って言うし、いつつも黒い服ばっか着てる。黒じゃないのなんて、寝る時くらいかな」

黒。彼のパーソナルカラーだ。仮説が補強されてしまった。

「なぜ就寝時の格好まで知っているか訊いていいか」

「何でって、その…まあ…時々泊まりに行くから。ホントに時々。だ、だってそういう関係なんだもん！　しょーがないじゃんっ」

「ナル」とそういう関係ならさもありなん。これは二つ目の仮説

が正解である目算が高くなった。

「……冗談にしては笑えない」

「冗談でこんな恥ずかしいこと言えるかあっ！」

「口でなら何とでも言えるな」

僕が冗談だと言ったのは君の発言じゃなく、君が他にもない僕の前にいるという状況そのものなだけだな。

「いーよ。なら証拠になるようなこと言っただけでもいいけど？」

まずー、ナルの朝の日課は太極拳」

「それがどうした」

僕の日課でもある。純粹に肉体を鍛える目的でやっているという違いはあるが。

「OK、じゃ速攻でとっておきを。一応あたしたち恋人同士だし、まあ夜のお付き合いってのもあつてね、その時ナルは耳たぶの裏にキスすると結構……」

「分かった。それ以上言わなくていい。むしろ言っな」

そんな当人同士の事情を赤裸々に語らないでくれ。親の情事を知ってしまった子の気持ちは今よく理解できた。

「名前は？」

「へ。あ、あたしの？」

「この場には君しかない」

彼女はふくれっ面から回復してから、こてんと首を傾げて言った。

「麻衣。谷山麻衣」

その名乗りで仮説は完成した。

ああ、こんな極上の悪夢があつていいものなのか。

「？　どうかした？」

「いや。どこかで聞いたような気がしたただけだ。思い出せたら言う。僕は」

「渋谷一也でしょ。本名はオリヴァー・デイヴィス。呼び方はナルでいいのかな？」

「……、それでいい。どうせ周りもそう呼んでいる」

パーソナルデータは彼女がさっき述べた通りだ。今さら僕の名前を呼んでもらおうなんて思わない。

「僕は君をどう呼べばいい。何か希望があるなら聞く」

「お好きにどうぞ」

「じゃあ——麻衣」

まさか僕が呼んでいたように呼ぶわけにもいかず、苦肉の策で呼び捨てにしてみた。

麻衣は面食らっていた。まずい呼び方だったか？

「麻衣？」

「へ！？　あ、いや、何でもないっ。ちょっとびっくりしただけ」

「そうか。間の抜けた顔をしたから何事かと思った」

「なにおーっ！？」

憤慨する麻衣を躲しながら、この悪意の仕掛人をどう料理してやるかについて僕は考えを巡らせた。

麻衣には僕の部屋に泊ってもらった。行く宛てがない彼女を放り出すなんて真似はできない。麻衣が僕の予想通りの人物ならばなおのこと。

僕は麻衣が眠ってからマンションを出て、建物の裏手に回り込んだ。生垣のある歩道で待つ。昼のあれが来るかもしれないのに単身こつという行動に出られたのにはれっきとした理由がある。

「——どういふつもりですか」

闇の中がみよん、と伸びて、表面張力が切れたところで白猫が出てきた。麻衣がこちらに来たきっかけも白猫だった。

白猫がこれまたみよんと伸びてそれが段々とヒトの形を作った。白い女だ。服装はパステルカラーで髪も銀に近いプラチナブロンドだから白いというのは語弊があるかもしれない。強いて言うなら雪花石膏の肌が白のイメージを与える程度。それでも彼女はまぎれもなく白だ。

白い魔女。この事態の仕掛け人。

「麻衣はあの谷山麻衣なんですな。それもまだ――頃の」

「ええ。貴方という存在を育て上げた最大の存在である谷山麻衣。私がこの世界に連れて来たわ」

あたまが沸騰しそうだ。

「何故連れてきたんですか！　よりによって、まだ何も知らないあの人を！」

白い魔女は淡々としたものだっただ。

「まだ『谷山麻衣』である彼女でなければ、異分子を排除しようとする働きに引っかけからずに貴方の世界に召喚することはできなかった。この世界には谷山麻衣が必要。貴方の名前を呼んでもらうために」

「なま、え」

「『ナル』ではない、貴方の本当の名前。名付けた親にしか呼べない貴方という個を表す名前」

この女は魔女だ。知っていても当然だ。

僕には実の両親しか呼ばなかった秘密の名がある。周囲には英名で通したが、親子だけになると父も母も必ずその名で僕を呼んだ。両親が死んだ今となつては誰もその名で僕を呼ばない。

「産み直しの儀式。真実の名を呼ぶことで貴方に再び『貴方』としての命を吹き込む」

絶句した。

そんなこと誰も頼んでない。僕の望みはそんなことじゃない。本当の僕は十年前に殺されてもう息を吹き返すことはない。だから僕は「ナル」として生きてきたんだ。死んだ僕がかぶれる皮は「ナル」しかなかったから。それを今さらになつて。

「そんな度外れてふざけた親切を施そうつてのか！ あの女を殺しにいく直前になって！ あんな人までここに引っ張り出してきて！」

白い魔女は吐き気がするほど無表情だ。

「それが私の『正義』。欠ける者なき理想の庭を造る。貴方を死なせない。セカイを変える。それが私の『理想』」

僕の師に当たる女性が言っていた。こいつは、目の前の白い魔女は、この世で最も業深い名を冠している。本当だった。

「——もういい。あなたと話していると吐き気がする。さっさと消えてください」

白い魔女は身を翻した。白猫に変じて闇の中に消えて行った。

僕は、手近な壁を殴りつけた。

「今さら……」

そう。何もかも今さらだ。僕は『僕』に戻りたいなんて思っていない。ただあの女を殺す。そのためだけに生きてきたんだ。

心がゆらぐ。ゆらゆら、定まらない。

僕は麻衣にどう接すればいいんだろう？

シグナル・アロー（後書き）

ここですでに彼の正体に見当のつく方もいらっしゃるかもしれませんが。

ちまたで・・・（ネタバレにつき伏字）をちらほら見かけるので私も挑戦してみようかと思いましたが次第です。

私のGH版權はすべてこの作品がベースになっておりますので、ためしに公開してみることになりました。タグにもあるように突然消える可能性もありますのでご了承ください。

注記。

年代や年齢、時代考証は「悪霊補完委員会」に則っています。

ライトグリーン・メモリアル ？（前書き）

この世界の「ナル」によってここがパラレルワールドかもしれないと教えられた麻衣。

麻衣は「ナル」の家にお世話になることになった。
そこで麻衣は「ナル」の過去に触れる。

ライトグリーン・メモリアル ？

XXXX2年8月7日。

僕が、殺された。

眠りから浮上する意識が敏感に他人の気配を感じ取った。
師に鍛えられた僕の体は意思と関係なしに覚醒し、気配の主を捕まえてソファアの上に押し倒し、その人物の喉を押さえた。

意識がはつきりした僕は、押さえ込んでいる相手が麻衣なのだと
ようやく理解した。麻衣は僕に急所を捉えられているという状況が
理解できていないのか、目をぱちぱちと瞬いて、動かない。

なんたる失態。よりによって麻衣を刺客と勘違いするなんて。あ
あ、こんな時は勝手に反応するように鍛えた体が憎い。どうしてい
いか分からない。麻衣を怯えさせていたらどうすれば……

「おはよう、ナル」

——何でそんなに普通の反応ができるんだ？

麻衣はほほえみさえ湛えている。下がった目尻が、上がった口の
端が、恐れのない声が、狼狽していた心を包み込んでくれた。

理性で体を動かして麻衣の上からどいてソファーからも降りる。起き上がった麻衣に対して俯いて謝罪を口にした。

「すまなかった……麻衣に攻撃しかけるなんてどうかしていた」

すると麻衣は僕の両頬を両手で包み込んで笑った。麻衣の手もすごく温かいわけではないのに、ほうつとした。

「別に気にしてないよ。何ともない。ホラ、あたしピンピンしてるでしょ」

そうだな。今日の前にいるあなたは至って元気だ。

「朝ご飯、作るよ。台所借りていい？」

「ああ。好きに使ってくれ」

麻衣の手が頬から離れた。少し惜しいな。せつかく温まってきたのに。

やわらかかったな、麻衣の手。男の手とは根本的にちがうやわらかさだった。

麻衣がキッチンに姿を消してから、僕はソファーに座り直した。来日して自炊する覚悟を決めていただけに、こうしてまた人の手で用意された食事をするのには拍子抜けだ。

「SPRの仕事はいいの？」

「休業にする。奴が現れたからには悠長に構えているわけにはいかない」

どうせ僕が日本すべきはオフィス開設に当たつての下見と準備だ。その先は本国の管轄。多少遅れても僕に被害が来るわけじゃないんだ。

「Her Majesty's Blend?」

キッチンから麻衣の声。ああその茶葉か。

「イギリスの知人が饂飩にくれた物だ。まったく、今生の別れでもあるまいし」

くれた同僚は高級品でもぼーんと人にやって平気なほど物に拘らない神経の持ち主だが、今回は特別上等な物をくれた。僕が何のために来日するか知っていたからだ。僕は話してはいないけれど、察しだけは背筋が凍るほどいいから……

「ったあ」

キッチンで麻衣の痛そうな声がした。どうしたんだろう。

様子を見に立ってキッチンに入る。

「麻衣。今何か」

「あ、ナル、何でもないよっ。ちょっとドジっちゃっただけ」

麻衣は指を立てた。——指先から滴り落ちて手の平まで赤く濡らす、血。

血を流しているのは、麻衣。

麻衣が、血を流している。

フラッシュバック。鮮烈な赤。赤い海に浮かぶ死体とも呼べない女の肉塊。赤く汚れた栗毛の下に瞳孔がなくなった目。

幻像を結ぶ。赤い風呂敷包み。下のほうだけ赤い。赤い。ちょうど人間の首が入る程度の大きさの包みが赤い。中に入ったものは静かに目を閉じていた。

シンクに手を突いた。吐き気がする。気持ち悪い。

血。

血。

麻衣の血。

やめろ、僕の思考を犯すな。

「ナ、ナルっ？ ちょっと、しっかりして！ ねえ、どうしたの！
？ やだ、なんでっ」

麻衣が泣き出しそうな声を上げた。少しだけ理性が戻った。
手を伸ばす。麻衣の、血がついたほうの手を掴んで覆い隠した。

「君のほうが、パニックになって、どう、する。しばらくすれば治る、から、騒がしくする、な」

落ち着け。この麻衣は関係ないんだ。いくら別の世界の同じ人間だからってどうってことはないんだ。だから落ち着いて……

——え？

背中が温かい。誰かが撫でてくれている。誰か。ここにいるのは僕と麻衣だけ。だから、僕を宥めるように背中を撫でているのは麻衣しかない。

今までの誰にもされた験しのない行動、味わったことのない安堵
ああ、これなら、大丈夫だ。

ようやく落ち着いて顔を上げた。麻衣が不安げに僕の顔を見つめている。

悪いことをした。こんな訳の分からない行動を目の前でとったりして、びっくりしただろうな。

「ひょっとして、……血、ダメなの？」

するどい。逡巡したが、首肯した。

「あの人が死んだ時、一面血の海で、それ以来ずっとだ」

だから麻衣の血は僕にそのトラウマを呼び覚ますには充分すぎる威力だった。

「あの人って？」

「家族」

手を放してシンクに両手を突いて長く息を吐いた。

麻衣は納得した様子を浮かべ、次いで残念そうに眉根を寄せた。

あの人、を誰だと思ったかはどうでもいい。どうせ麻衣が浮かべたのが誰であろうが外れた。僕だけが彼らの陰惨な死に様を知っていればいい。

「一面血の海って、事故？」

普通はそう思うよなあ。でも申し訳ない、ちがうんだ。

「殺された」

麻衣は目を見開いてひゅっと息を呑んだ。ああそうか、麻衣の世界ではまだ人殺しは大事件として扱われているんだった。こつちじや人なんて、僕の家族に限らず、右を向いたか左を向いたかだけの差で殺されるものだ。

「やったのは生粋の妖怪を従える術者の女。その人は奴が使役した妖怪に食い殺された。僕を庇って」

僕さえいなければ生きていられた。あの女は僕しか殺すつもりはなかったんだから。

まだ覚えている。僕を庇うために飛び込んで、僕を抱きしめたまま妖怪に食い殺された時の音。引きずり出された臓物と、噴き出す血。

僕を抱いた腕は死後硬直でどんどん冷たく硬くなって、周りにいた大人が引きずり出してくれなかったら危うく死体の腕から抜け出せなくなるところだった。

「その人のこと、好きだった？」麻衣は恐る恐る僕に尋ねた。「……愛してた？」

「——ああ」

愛していたさ。きっとこの世の誰よりも。僕の世界の半分だった人だ。

あの人死んで僕の半分が死んだ。別の個体である者が死んで自己も死んだというなら、そのつながりは愛と呼ぶ他ないだろう。

とたん、麻衣が僕に背後からタックルした。女の細腕が僕の鳩尾

辺りで交差している。ちょうど肩甲骨の下にささやかながら確かなふくらみが押し当てられている。ハグされていると分らないほどにぶくはない。

「どうした、麻衣」

「ベベベ別に！？ 何となく！」

自分からやっておいてその狼狽ぶりはないだろう。いや、おもしろいけど。

「動けない」

「うわ！ スイマセン」

麻衣が離れたところでまたシンクに手を突いた。気分が悪くなっただんじやない。おかしくなったんだ。麻衣があんまりオタオタするものだから。

漏れる笑いを必死になって殺した。麻衣は顔を真っ赤にして、陸に打ち上げられた魚のように口を開閉させている。侮辱されたとも思っているんだろう。

そこでトースターが鳴った。

「あ、ごめんつ。すぐ作るからもうちょっと待って」
「分かった」

麻衣はバタバタとトースターに走り寄った。いても手伝えることはないだろうし、手伝わないほうがいいだろう。この僕が手伝いを申し出るなんて麻衣の精神衛生によろしくないから、あえて無言でキッチンを出た。

バスルームに入って洗面所で手を洗う。麻衣の手を握った時についた血を洗い流す。

血がトラウマだと麻衣には言ったが、自分自身に付着したものの、流したのなら別に平気だ。いくら残虐な殺人現場を見ていたといっても、血を全て恐れていては生活などできやしない。麻衣が出血していたという光景がトリガーだった。

リビングに戻ると、麻衣がトーストの載った皿をテーブルに置いた姿勢のまま、物憂げな風情で立っていた。

喜怒哀楽が出やすい彼女だが、哀の表情は初めて見た。

僕の過去に思いを巡らせてくれているんだとしたら、どうにも胸が詰まった。麻衣を憂えさせたくて話したわけじゃないのに。

ふいに麻衣はぼつりと漏らした。

「それでもナルなんだから、いい」

麻衣は自分の言葉に納得したようで、足取り軽くキッチンに戻って行った。

——僕は麻衣を騙している。

僕は麻衣のナルじゃない。姿形が同じなだけでナルじゃないんだ。でも言えない。言ったら僕は破綻する。麻衣に僕が何者か知られたら、辛うじてバランスを保っている僕の積み上げた歳月が意味を失ってしまう。あの女との決着を控えている僕に、そんな予断は死を招く。

ごめん、麻衣。

本当の名も告げられない僕をどうか許して。

「で。あたし、何すればいいの？」

朝食が終わって食器を片づけながら麻衣が尋ねてきた。

関係ない話になるが、どうして食器を洗う時の、食器の音や水の音はいやに耳に入ってくるんだろう。

家庭の象徴ともいうべき音。僕はとっくに失ったものだけだ。

「好きにしていいい」

麻衣の行動を制限する権利は僕にはないが、連れ歩くのも得策じゃない。だからこの部屋にいる限りは麻衣のいいように行動してくれればいい。

「僕は出かける所がある」

「はいはい。行つてらっしゃい」

険のある言い方だ。心なし、食器がぶつかる音も荒くなった気がするし。外出を制限したから怒ったのか？

「要る物があるならついでに買ってくる」

代わりに着替えや生活用品を買ってきてあげようという程度のこと

とだったのだが、麻衣はくわつと目を見開いた。今の発言のどこにそんなこわい顔になる余地が？

「い、いいよ！ それくらいなら一緒に行く。用事にも付き合う」

「危険かもしれないぞ」

「ナル、婦人服コーナーならともかく、一人で下着売り場行けるの？」

ぐうの音も出なかった。

……麻衣が関わりと状況がどんなに切迫していてもつい悪い選択肢をとってしまうなあ。

麻衣は冷蔵庫の中を見て早々に食糧を買い足すべきだと主張した。

「昨日の分だけ食べて今日、本格的に買出しに行こうと思ってたのが見え見え。どの世界でもやっぱりナルって生活力低いんだから」

じゃあすぐにデパートにでも行くかと聞けば、デパートは高いからスーパーマーケットがいいと反対され、さらに生ものを先に買ったら傷むかもしれないから僕の用事の後で買出しをする、という流れになった。

麻衣の生活力の高さが垣間見えた。父母を亡くして独り暮らしだったというから自然なのだろうが、それがかえってかなしいと感じ

るのは、麻衣に対する侮辱なんだろう。

こうして、牧歌的ながら切実な事情に負け、僕は麻衣を連れて外出することになった。

ライトグリーン・メモリアル ? (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。木崎です。 > (―
―) <

今回はナル君(主人公)の過去話でした。中庭同盟の家族関係を元に考えてみました。少なくとも麻衣は双子の両親がどう死んだかを知らないので多少の展開上の無茶は利くと踏んでいます。

相手がナルと分かればどんな行動も許容しちゃう麻衣ちゃんです。ふつ―は首しめられかけたらもつとビビるよ(^―^;))

ナル君がすでに誰かわかっている方もおられるかと思いますが、もちつとおつきあいください。まだまだ続きます。

タイトルはナルのサイコメトリからです(↓「緑のハレーションが起きる。対象が死んだ時のクセなんだ」)

ライトグリーン・メモリアル？

僕は麻衣を伴って目的地であるスポーツセンターに到着した。

「用があるのはこの弓道場」

「じゃあ、ずっと担いでたそれは」

「弓一式」

弓道場に向かう道すがらの、ささやかな会話。しかし麻衣にとっては特別なものだった。彼女の知るナル相手では雑談さえできないのか。

「ナルに弓道のたしなみがあるとは思わなかった。イギリスでも弓道ってできるもんなの？」

「弓道はできない。欧米で弓術をやるうと思うならアーチェリーになる。アーチェリーも弓道の射法八節を参考にアクションを8段階に分けているが、得物や動作は全く別物」

「できないのにあえて日本の弓道ねえ」

麻衣はそれ以上追及してこなかった。「ナル」に対しては尋ねるだけ無駄、答えるわけがない、と彼女の空気は如実に語っている。

まったく、彼女の「ナル」はどれだけコミュニケーション不全者なんだか。

奥に神棚と日章旗が据えられた射場から、芝を敷いた矢道、そして的場を臨む。

担いでいたケースから自前の弓を取り出す。矢は施設のものを使用する。本番用の矢は自宅で封印中だ。

「射場には近づかないように」

「じゃば？」

「このライン。射る人間が立つ場所」

「はい」

麻衣は殊勝に返事し、座る場所を探して辺りを見回す。上座を示してやると小走りに行つて、律儀にも正座した。……持つて30分と見た。

僕は弓を持つて射場に立つた。

N o c k i n g (矢を番える)。思い描く。

イメージは一人の女。袴。御幣。異形の蛇。貼りついた笑み。狂喜。

女の、のどを、射抜くイメージに合わせ、矢の軌道を脳内に出力。

R e l e a s e (離れ)——矢を放つ動作。
的中。

……こんな夢想をする時点で「弓道」を語る資格はないんだがな。

弓と他の武道の違いは相手がいない点だ。

敵は己自身。的は自分を映す鏡。僕の師はそう語った。

「中てる」気で矢を放つてはいけない。矢は「中たる」ものであり、正しく弓を引くこそが弓道の本義。——つまり、唯一の標的を想定して鍛練している以上、僕の弓はどうしても邪道の域を出

ない。

あえて正道を外れたのだ。

あの女を、あの怪物を、射抜くために。

【麻衣 side】

結論から正直に言おう。

すさまじくかつこよかった。

買い物を終えてマンションへの帰路についたあたしは、ナルの背中を見ながら彼の射（弓を実際に射ること）を思い出していた。

外見がイイからじゃない。射た矢は実に70本本、その全てが的真ん中に中つたからでもない。

美しかったんだ、弓を引く彼が。

……人生18年、まさかこの形容詞を本気で使う日が来ようとは思わなかったよ。付き合ってるほうのナルにさえ使ったことないよ。姿勢、動き、しぐさ、どれをとっても完璧で（といってもあたしは弓道素人だからそう感じただけ）。横顔は張りつめていたけど穏やかでもあって、まるで彼の立つ場が別世界のように——崇高。

惚れ直したじゃないかちくしょー！

「何見てるんだ」

はうあ！ 何で後ろから見てたのに気づくかなー。背中に目でもついてんじゃないか？

「ナ、ナルはさ、何で弓道なんてやろうと思ったの？ やっぱ太極拳みたいに必要なに迫られて」

ナルは押し黙る。いーんだ。答えてくれなくたって。慣れてるもん。ケナゲな麻衣ちゃんも恋人が冷血漢でもめげませんっ。

「――麻衣。存在しないものを殺すためにはどうすればいいと思う？」

「はい？」

「幽霊。妖怪。精霊。神仏。魔物。悪魔。実体を持たないとされる幻想上の存在。これらに対して殺害の手段として思いつくものは？」
「……ない。霊相手だって、普段から相手してるけど、『殺してる』って感じじゃないし」

神様や仏様なんて論外だよ。どー殺せと。悪魔……はなんとなくイメージできる。杭を打つとか。

妖怪はけっこうできそうだ。退治のむかし話がよくある気がする。

「弓はその手段の一つだ。僕がこれから相手取ろうとしている存在は弓矢で射て滅ぼしたという伝承がきっちり残っている。そうでなければこんな、間合いを詰められたらジ・エンドの武装を選ぶものか」

??? なに？ ナルはこれから何をする気なの？

「十年くらい前、になるな。僕が孤児だったことは知ってるんだろ

う？ それは僕の実の両親が殺されたせいだ」

ナルとジーンがデイヴィス夫妻の養子。あの夏、リンさんに聞いて知っていた。でもそんな事情があつてだとは、ナルは話さなかった。リンさんも、両親のマーティンさんとルエラさんも。

話すわけがない。あたしが同じ立場だったらおいそれと話せはしない。

「ごめん……」

「謝らなくていい」

こういう時に謝っちゃうのって、こういう気持ちなんだ。

親が早くに死んだことを話すと、ほとんどの人があたしに謝った。別に謝られるようなことじゃないと常々思ってきたけれど、今日、どうしてみんなが謝りなくなるか分かった気がする。

「僕が超心理学の世界に足を踏み入れたのは、実の親を殺した女を葬る手段を探るためだった」

あたしは知らない。

ナルとジーンの実の親がどんな人たちだったか、何があつて死んだか。ナルは何で超心理学を研究しようとしたのか。

きつとみんなも知らない。詳しく知っている人なんてリンさんや森さんくらいかもしれない。

——もしこの世界が「谷山麻衣がいなかったことしか違いがない世界」だとしたら、あたしが元いた世界でもナルは同じ事情を抱えて超心理学の世界に飛び込んだことになるよね。それにしても色々和平仄が合わないことがあるんだけど……

「僕個人のサイ能力だけじゃ足りなくて、こんなものにまで手を出した」

ナルは握っていた弓に視線を落とした。

確かに今やナルのPKは全く使えないに等しい。ジーンがいない状態でPKを使おうものならナルのほうはその女より先に死にかけない。そのジーンとのコンタクトもごく限られた状況でないと使えない。だから弓。

「ん？　じゃあさ、弓が破魔の道具なら、昨日もそれ持ってたら土蜘蛛撃退できたんじゃない？」

「……………」

——あたし最近、ナルはここ一番で凡ミスする人じゃないかと思うようになってきてる。初っ端の旧校舎とか、阿川家とか、思い出すと色々思い当たるんだよね。詰めが甘いと言おうか。

ナル、ミスったね。弓を持ち歩くって考えが頭になかったんでしょ？

「僕の10年間があの一瞬で無駄になったな」

ナルは嘆息に乘せて呟いた。

「じゅ、10年！？　10年も修行してたの！？　そんな長い間やってたんなら、1回失敗したくらいで落ち込むことな」

「どれだけの年数を重ねようと、結果が伴わなければ意味はない。家族を殺されてからの時間を有効に活かせなかったなら、それは徒労だ」

「そう言わないでよつ。今日までがんばってきたんでしょ？ その努力は絶対無駄になんかならないよ」

ナルはそれ以上は言わなかった。よかった。あたしなんかの言葉で効いたんだ。

——でも気になる。ナルの精神をこうも追いつめている犯人は、どんな奴なんだ？

「……。ね、その人を、その、殺したの、どこのどいつ？」

事故の隠蔽の結果としての殺人じゃない、悪意をもってナルの大事な家族を殺した人間がいる。妙にざわつく気分。

「安部日高。いざなぎ流陰陽道の太夫。式の使役に長けた女で、実体のある妖怪を従える実力者だ」

誰とも知らない名前だ。心当たりはない。

「僕の父方の曾祖母が日本人で、日高と同じ太夫だった。日高は曾祖父の血筋の根絶を望んでいる」

「ひいおじいさんはその日高って奴に何したの？ 関係ないナルの家族を殺すくらい酷いこと？」

「曾祖父自身は日高とまったく関わっていない。最大の原因は、曾祖母と愛し合ったこと」

「ひいおばあさん？」

「日高は同性愛者だったんだ。曾祖母に横恋慕した末に曾祖母と結婚した曾祖父を憎んで、曾祖父の血を継ぐ男児がこの世に生きることを許さなかった。理解できる心情だ」

理解、できるって？ 今でさえ他人の好意なんて迷惑なもの、理

解の外にあるものと切り捨てるナルが、愛憎を理解？ …… 軽く吐き気がするよ。

「最初は曾祖父」

ナルの歩みが遅くなる。

「次に祖父」

ナルの歩みがさらに遅くなる。

「父」

ナルの歩みがすごく遅くなる。

「母」

ナルの歩みが止まる。

「最後は……」

「もういいよっ。無理して話そうとしなくていいっ」

自分で聞いたという情けない話だけど、これ以上は無理だ。なのにナルは、やめない。

「日高は最後に残った僕を殺すつもりでいる。今日まで生き延びられたのは運が良かったからに過ぎない」

もうナルが辛いだろうからやめてほしいのか、あたしが怖いからやめてほしいのか判然としない。

「あの女は僕をまだ狙っている。昨日のことは僕が日本に戻って来たことを察しての小手試しだろう。行動を見透かされている。土蜘蛛用の祭具はプルパともどもまだ届かない」

澄んだ黒い目はあたしに向いたまま、あたしを見てはいなかった。こっちのナルが時々見せる尊大な目つきに似てるけど、これはちがう。見下すのにも似た、そう……憎悪。

あのナルが、他人を、憎んでいる。

「僕が生きたために誰かを殺すことが必要なら、僕は僕のために迷わない。あの女が存在して今も息をしているだけで冗談抜きに心臓が止まりそうなくらいおぞましい。だから、僕は今日まであの女を、」

あたしは肝心なところで耳を塞いだ。手で塞いだんじゃなくて脳で聞くなと命じて声の受け取りを拒否した。

ジーンを死なせた犯人にだって何も言わないナルが、ここじゃコロスなんて、言ってる、そんな、現実は。

「ダメだよ——」

「麻衣」

「人殺しなんて絶対ダメ！ 仇討ちでも何でもナルが同じことしたら、ナルだってそいつと変わんないよ。そんなメチャクチャな理由でナルの家族を殺すような殺人鬼のためにナルが手を汚すなんて間違ってる！ やめてよ、ダメだよ！」

「麻衣は僕が黙って日高に殺されるのを待てと？」

「違う！！ そうじゃない、そうじゃ……そうだ、警察。殺人犯なんだったら警察に」

「安部日高は戸籍上は死んでいる。東京地検の心霊事件捜査班でも死人を法廷に送れはしないし、警察は死人から守ってはくれない」

「そんな……」

「自分が手を汚さなければ自分を守れないケースもあるんだ、麻衣」

「どうしても、そこまでしなきゃいけないの？」

「ああ。どうしても、だ」

ナルの目には迷いなんて一つもなかった。たった一点を目指して天を目指す氷山を思わせる瞳。

あたしなんかじゃナルの決意を覆せない。分かって、それでもナルにそんな血まみれの道を進ませたくなかった。けれど、あたしじや止められない。堂々巡りだ。

結局マンションに帰りつくまでに、あたしは一言もナルに言い返せなかった。

ライトグリーン・メモリアル？（後書き）

長らく放置してしまっただけで申し訳ありませんでした。木崎です。

今回大変でしたのは弓道の知識。Wikiやら弓道コミュニティやら動画やら本やらで必死で弓道知識をかき集めましたが……使えたのこれだけ。没ネタ多すぎ。

なぜ弓にしたのかは小出しに語っていくことになるでしょう。メタ的にはこれかなりの意味を占めますので。

もうこの時点で「こいつナルじゃねー！」と叫ぶ方がほとんどでしょう。

まあまあ、もちつと。もちつと麻衣ちゃんと一緒に騙されてください。

本当は主人公視点一貫で行くつもりでしたが、麻衣の視点も取り入れました。展開の都合上、結局は麻衣の目線も必要なんですよね。初志貫徹できなかったのは残念です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2330x/>

「Who are You?」「I'm your...」

2011年11月21日13時43分発行